

第23期考古学セミナー（2021年度）

—発掘調査でわかった山形県内の近世城郭と出土遺物—

第1回講座

講義②

館山城跡の発掘調査と出土遺物

米沢市教育委員会

佐藤 公保 氏

令和3年9月26日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

「館山城跡の発掘調査と出土遺物」

米沢市教育委員会 佐藤公保^{まさやす}

1 はじめに

史跡館山城跡^{たてやまじょうあと}は、米沢市大字館山及び大字口田沢に所在する山城を中心とした中世～近世初期の城館跡である。米沢市では、平成 22 年度から館山城跡整備事業を開始し、平成 28 年 3 月 1 日に山城及び同時期の山麓居館^{ねごや}（根小屋）と推定される平場の一部が国の史跡に指定された。

平成 28 年度以降、大南遺跡等^{おおみなみ}の大規模開発事業に伴う緊急発掘調査が相次ぐこととなった。それらの調査対応で事業を休止していたが、令和 2 年度から再開し、今年度は 9 月 13 日から発掘調査を実施している。

2 館山城跡の位置と立地

館山城跡は、米沢城跡から西へ約 3km の米沢盆地西縁の丘陵地に位置し、西側から延びる舌状丘陵の東端に築城された山城である（第 1 図）。地元では「長峯山^{ながみねやま}」や「城山^{しろやま}」と呼ばれ、その標高は 310～330m である。丘陵の南北両側には、鬼面川^{おもの}の支流である 2 つの河川、大樽川^{おおたる}と小樽川^{こたる}が東へ流れており、本遺跡の東側で合流して鬼面川となる。本遺跡はこれらの河川を堀とした天然の要害であり、さらには河川の合流点や渡河点、付近を通る会津方面への街道筋を押さえる上でも重要な拠点である。

山城の麓には、大樽川と小樽川によって形成された河岸段丘があり、この段丘面（平坦地）に館山北館^{たてやまきただて}・東館^{ひがしだて}・南館^{みなみだて}と呼んでいる遺跡がある。このうち、北館、東館から山城と同時期の遺構群が発見されており、山城と山麓居館が一体となった遺跡群である（第 2 図）。

3 文献史料等からみる「館山城」

「館山城」は、江戸時代後期に米沢で編纂された地誌には、文治 5 年（1189）に新田経衡^{ぶんじ}が築城したとするものがあるが、これを裏付ける史料は無く築城時期がわかる明確な史料は無い。仙台藩主伊達氏の正史「伊達治家記録^{だてしげ(か)きろく}」には、「館山城」に関連する記事が 3 つある。

(1) 「伊達治家記録」（史料 1～3） ※元禄 16 年（1703）に輝宗・政宗・忠宗の治家記録が完成。

①元亀元年（1570）：伊達輝宗^{げんき}の家臣新田四郎義直^{てるむね}の居城（史料 1）。

②天正 12 年（1584）：伊達輝宗が隠居所として「館山城」を普請する（史料 2）。

③天正 15 年（1587）：伊達政宗が輝宗の隠居所「館山城」で地割^{じわり}・普請を行う（史料 3）。

政宗による再普請は、後述する伊達鉄斎宛書状など（史料 4・5）から天正 18 年（1590）まで行われていた可能性があるが、その目的は不明とされる。

政宗は天正 19 年（1591）の奥羽再仕置で岩出山（宮城県大崎市）へ移ることになり、政宗が再普請した「館山城」が完成していたのかは不明で、「伊達治家記録」にはその後の様子がわかる記事は無い。

(2) 「伊達天正日記」や政宗関連書状（史料 4～6）

「館山城」という名称の城館は確認できないが、館山に「要害^{ようがい}」と「たて山御たて^{たてやまおたて}（館山御館）」と呼ばれる 2 つの城館が確認される。「要害」とは主に山地や丘陵などに築城された山城を示し、「館」とは平地に築城された平城または居館と考えられる。また、「館山御館」は、「御」の字が付く「館」であることから、伊達氏の当主に関わる城館の可能性はある。

(3) その他の近世の史資料

①「直江城州書簡」(上杉文書 1497、米沢市上杉博物館蔵)

慶長 14 年(1609) 6 月に江戸の屋敷にいた直江兼統な おえ かねつぐから、米沢の奉行平林正恒ひらばやし まさつねに宛てた書状に「一 館山ひとつ たてやまのぎいっさいむようのこと之儀一切無用之事」との指示がある。後述する発掘調査の成果と関連する可能性が高い史料である。

②絵図

「出羽国米沢城下絵図」(国立公文書館蔵)

正保 2 年(1645) に米沢藩が製作した絵図で、館山城跡の場所は「古城」と書かれており、少なくともこの時点では廃城になっていたことがわかる。

「館山晴嵐たてやませいらん」(市立米沢図書館蔵)

元禄 8 年(1695) に描かれた風景画「米陽八景べいようはっけい」の 1 つ。城を思わず描写は無いが、かつては戦乱の地であったが今は人々が行き交う地になったとする内容の歌が添えられている。

「米澤領館山成嶋図」(宮城県図書館蔵)

1600 年代後半(1677 頃?) に仙台藩が製作。「館山城」の位置が明記されている。

③「米沢事跡考」や「米沢里人談」などの地誌

江戸時代中・後期に米沢で編纂された地誌には、「館山城」の位置についての記載がある(史料 7 など)。現在の館山一丁目から六丁目付近にあったとするもの(平城)、城山と呼ばれる場所にあったとするもの(山城)、これら 2 つを包括するものがあり、地誌でも 2 つの城館の存在が窺える。

なお、地誌には「館山城」を伊達氏の居城と位置付けているものもあるが、伊達氏の公的な記録ではそのような記載は無い。伊達氏時代の居城米沢城は、上杉氏が居城とした現在の米沢城とほぼ同位置にあり(小林 1961)、「館山城」も同時期に存在している。前述の「伊達天正日記」では、政宗が頻りに館山へ出かけており、用事が済むと居所に帰っていることから館山に居住していないことがわかる。

一方で、この時期の米沢では、「館山城」が伊達氏の居城という認識が一定程度根付いていた可能性があり、現在も色濃く残る。伊達氏の居城をめぐる認識が大きく変容した背景は興味深いものである。

4 発掘調査成果からみる「館山城」

館山城跡の全容解明を目指した本格的な発掘調査は、平成 22 年度に南館から開始し、北館、東館、山城を対象に実施している。南館は、柱穴や中世期の遺物がわずかに確認されたものの、戦後に畑地として利用されて大きく改変されているため、城館との関係は不明である(一時的な待避所という意見もあり)。

また、山城の西側にかつて寺院(館山寺かんざんじ)が存在したという伝承の残る地区もあるが、基壇や礎石などの遺構や遺物は確認されていない。

(1) 北館の調査

北館は面的な調査が行われた平成 13 年度調査の概要を中心に紹介する。約 2,800m²を調査した結果、掘立ほったて柱建物跡 33 棟、井戸跡 7 基、溝跡 4 条を含む 850 基の遺構が発見された。掘立柱建物跡群は、最大でⅨ期の変遷案が提示されている。中世期の遺物は、16 世紀代の輸入陶磁器、瓦質土器、内耳土鍋、中国銭などが出土している。また、現在は削平さくへいされているが、平成 13 年度調査区の西側に土塁が存在していたほか、構築時期ははっきりしないが、小樽川の南岸に護岸とみられる石積遺構がある。

(2) 東館の調査

東館は平成 15 年度、平成 23・24 年度に発掘調査が行われているが、トレンチ調査のみで全体像はまだまだ不明な部分が多い。これらの調査で掘立柱建物跡、井戸跡、石敷遺構、短刀を埋納した土壇どこうや、池跡の可能性が指摘されている遺構が発見されている。中世期の遺物は、かわらけ、内耳土鍋、瀬戸・美濃せとみのからつ、唐津、鉄製品など 15 世紀後半から 17 世紀初頭のもので出土している。

(3) 山城の調査

①縄張の概要

山城には土塁や堀切で区画された曲輪と呼ぶ平坦地が3カ所あり、東から曲輪Ⅰ～Ⅲとしている。範囲は、曲輪Ⅲ西端の堀切から東側の丘陵先端部で測ると約320m、山麓の丘陵裾部で測ると約350mである(第3図)。大正9年(1920)から稼働する館山発電所の施設によって一部の遺構が影響を受けているとみられるが、保存状況は良好である。曲輪Ⅱ・Ⅲを西に配置し、さらに曲輪Ⅱとの出入口を柵形として西側の防御を厳重に固めた曲輪Ⅰが主郭と考えられる。また、曲輪Ⅱ西側の高さ約5mの土塁や、曲輪Ⅱ・Ⅲ西側の深さ10m以上の堀切は注目される遺構である。発掘調査は、平成24年度に東館と接続するつづら折れの通路部分と曲輪Ⅰ南側の虎口、平成25～27年・令和2年度は、曲輪Ⅰ・Ⅱ、今年度は曲輪Ⅱ・Ⅲの調査を実施している。

②石垣の発見

平成25年度調査で、曲輪Ⅰ西側の柵形虎口とそれを構成する土塁から石垣が発見された(第4図)。この石垣は、戦国期の野面積石垣ではなく、築石(表に出ている大きな石)の表面をノミで粗加工した割石と粗割石(割っただけの石)を用いている(第5図)。石垣面の平面性が意識されており、粗割石も平坦な自然面(節理面)や割面が表面となるように積んでいる。この他、多量の栗石(裏込め石)が用いられること、正面を横長に据えるものが多いこと、矢割り技法(矢穴)が用いられるものがあること、隅角部に整形された角石と角脇石を用いた算木積み(さんぎづみ)が用いられていることが特徴である。

これらの特徴は、慶長年間(1596～1615)後半から元和年間(1615～1624)の石積技術を示しており、関ヶ原合戦後に上杉景勝が普請した江戸時代初期の石垣と考えられる(石川県2012)。現在の館山城跡の姿は、戦国期(伊達氏時代)の縄張を上杉景勝が江戸時代初期に改変(再普請)したもののだが、未完成だった可能性が高いと考えている。

築石の石材は凝灰岩で、小樽川を挟んで北へ約1.5kmに石切山と呼ばれる場所があり、ここで産出される石材(成島石)とよく類似している。ここでは昭和20年代まで石切が行われており、築石が切り出された形跡は確認されないが、このあたりが石切丁場であった可能性がある。

③破城とそれを指示した書状?

石垣は崩されており、破城(城を壊して使えなくすること、城割りともいう)が行われたと考えられる。石垣が築かれた柵形虎口周辺は、調査前は多量の川原石で埋め尽くされていた。これらの川原石は、もともと石垣の栗石として使用されていたもので、石垣を徹底的に破壊した痕跡である。なお、崩された築石はほとんど残されておらず、別の場所に持ち出されて再利用されたと考えている。

先述した「直江城州書簡」の「一 館山之儀一切無用之事」は、破城または普請の中止を指示した可能性が高い。

④戦国期(伊達氏時代)の遺構

石垣の下部に、戦国期の堀切が埋没している状況を確認している(第4・6図)。規模は、長さ約60m、上幅約13m、深さ3.5m以上あって、曲輪Ⅰと曲輪Ⅱを分断し北側斜面の縦堀と連続していたと考えられる(米沢市教委2016)。堀切は、石垣の普請に伴う整地で現況の深さ約60cmまで埋め戻されている。この埋戻し土から16世紀代の陶磁器類、下駄・杭または柱材などの木製品類が出土していることから、上杉氏以前の戦国期の館山城跡で機能した遺構と考えられる。

5 並松土手と「館山城」

現在の館山地区と矢来地区の境には、並松土手と呼ばれる土塁が存在していた。この土塁は昭和30年代の宅地開発等で大部分が失われ、現在は北側の一部のみ現存する。高さ4m以上、南北約1.4kmの範囲に築かれ、北西端は鬼面川まで延びていた可能性があり、戦国時代末期に流行した「総(惣)構」を彷彿とさせるものである。並松土手は土塁の東側に堀を備えていることから、ここより東側に位置する米沢城を守る施設ではなく、「館山城」

の防御を想定した土塁と考えられる。

「出羽国米沢城下絵図」では、並松土手が直江兼続の開削した木場川に分断されて描かれており、上杉氏が入部する以前から存在した土塁と考えられ、天正年間の輝宗または政宗の普請に伴って築かれた可能性が高い（須貝 2017）。

先述のように、文献史料から「要害」(山城)と「館山御館」(平城)と呼ばれる2つの「館山城」の存在が窺える。「館山御館」の位置は、大樽川・鬼面川の右岸から並松土手に挟まれた場所と考えられる。この範囲は、館山平城跡と呼ぶ遺跡として登録しており、輝宗の隠居所跡の伝承が残る場所（館山4丁目付近）がある。

6 まとめ

「館山城」は、新田氏に関わる城館として山城とそれに伴う山麓居館が一体となった「要害」として成立したと考えられる。発掘調査の出土遺物やAMS法による年代測定の結果から、15世紀後半から16世紀前半頃に築城された可能性がある。その後、天正年間の輝宗や政宗の普請によって大樽川・鬼面川の東側に拡大し、並松土手を東端とする広大な城域が形成されたと考えている。その直後に伊達氏は岩出山へ移封となった。伊達氏が去ったあとに米沢を治めた蒲生氏時代の「館山城」の様相は不明である。最後に上杉氏によって関ヶ原合戦後に山城は石垣を備えた近世城郭へと変貌を遂げようとしていたが、未完成のまま破城が行われて終焉を迎えたと考えられる。記録に無い上杉氏の普請の目的を明らかではないが、関ヶ原合戦後の不安定な政情に備えるためと考えられ、会津との境目の城の役割を担った可能性が指摘されている（中井 2019）。

引用・参考文献（年代順）

小林清治 1961 「伊達氏時代の米沢城下」『地方史研究』51

石川県金沢城調査研究所編 2012 『金沢城史料叢書 16 城郭石垣の技術と組織』

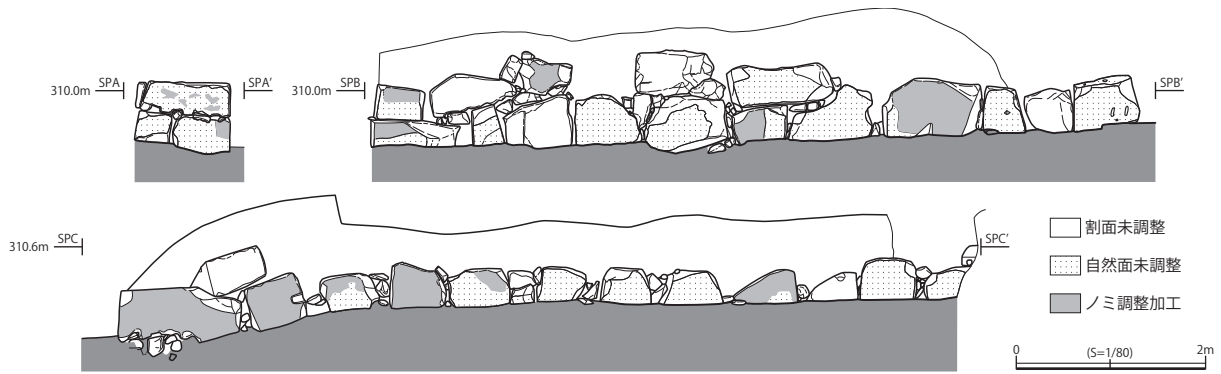
米沢市教育委員会 2015 『館山城跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第107集

米沢市教育委員会 2016 『遺跡詳細分布調査報告書第29集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第109集

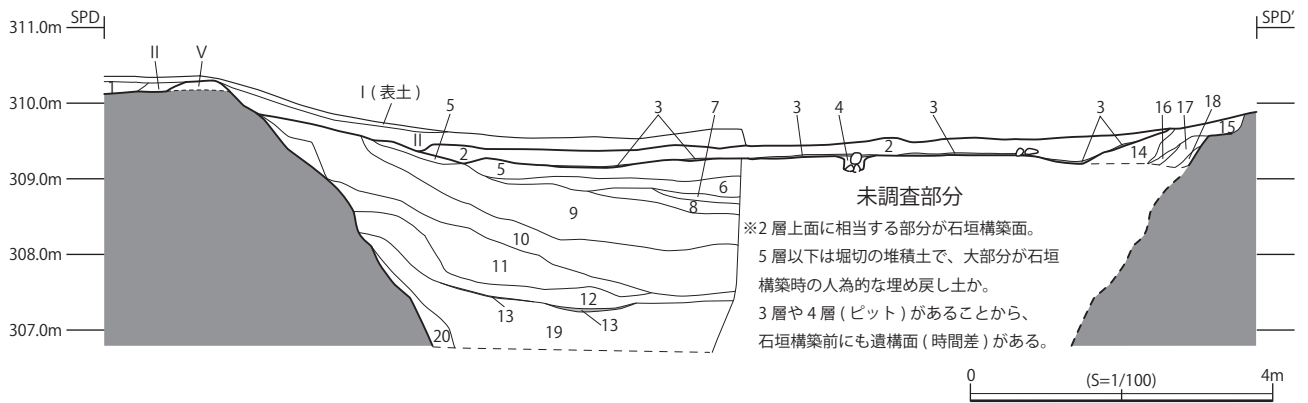
須貝慎吾 2017 「館山城下町の復元的考察 - 伊達氏における中近世移行期の城下町形態について -」『歴史遺産研究』第11号

中井均 2019 「館山城」『戦国の山城を極める 厳選22城』

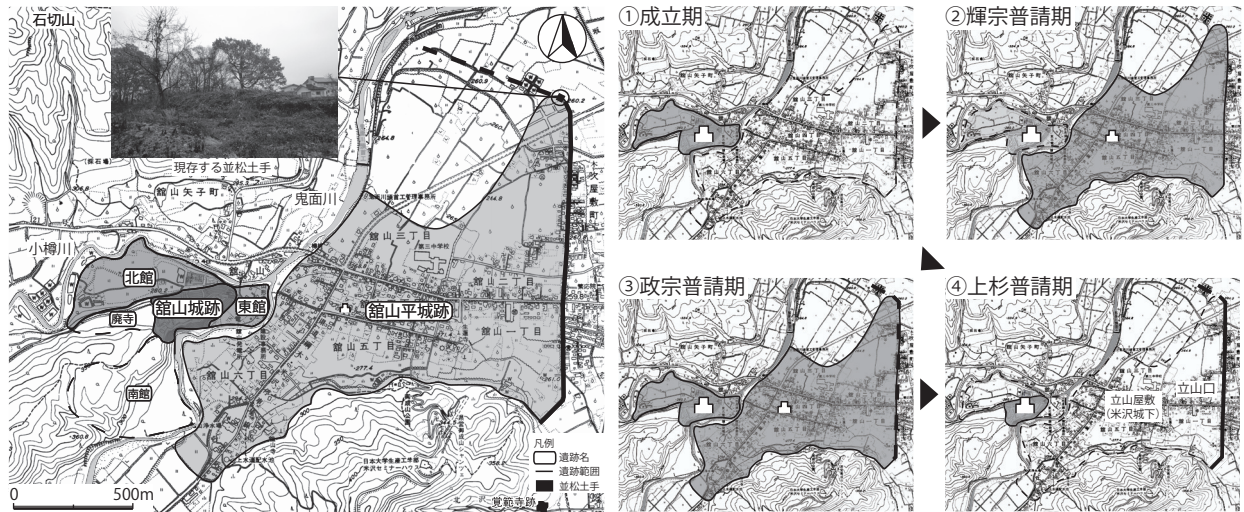
米沢市教育委員会 2021 『遺跡詳細分布調査報告書第34集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第120集



第5図 石垣立面図



第6図 曲輪I・II間堀切断面図



① 築城 (15世紀後半～16世紀前半頃) から元亀元年(1570)

伊達家臣新田氏の城館として築城され、根小屋(北館・東館)と共に機能する。館山平城跡の範囲は、史料から町場(館山町)が形成されていたとみられる。

② 天正12年(1584)頃

輝宗隠居所(館山御館?)が館山平城跡の範囲内に普請される。中心は平城か。

③ 天正15年(1587)～天正18年(1590)頃

伊達政宗による普請(並松土手も普請?)が行われ、城域が最大になったとみられる。奥羽仕置後の蒲生氏時代は様相は不明。

④ 慶長年間(1596～1615)後半～元和年間(1615～1624)頃

上杉景勝によって山城に石垣等が普請される(未完成か)。平城は、上杉家臣団の屋敷地となり、米沢城下に組み込まれる。

廃城は17世紀初頭を想定。

第7図 想定される館山城の城域と変遷図

参考：館山城に関連する文献史料

【史料1】「性山公治家記録 卷之二」元龜元年（1570）庚午 公御年二十七

四月辛丑。新田遠江景綱、其子四郎義直ヲ擲捕テ献シ、中野常陸宗時・牧野弾正忠久中叛逆ヲ謀ル、四郎モ与スルノ旨言上ス。御感斜ナラス。遠州速ニ四郎カ居城館山ニ取移シ下知スヘシト仰付ラル。

（中略）四郎カ父遠州其頃笹平ニ隠居セラル。（中略）四郎是非ナク是ニ与ス。笹平ニ行テ具ニ父ニ申ス。（中略）遠州大ニ怒テ、君ニ畔ク而巳カ父ヲ棄ル大賊、手撃ニセントテ刀ヲ抜ク。四郎即チ逃去ル。遠州有リ合フ所ノ従者纔ニ二十人許リヲ率テ、急ニ四郎カ居城館山ニ至ル。四郎ハ何ノ意モナク城下ノ市麩ニ近比造リシ浴室ニ在リ。遠州、城ニ入り四郎カ郎党等供ニ向テ、（中略）即チ大手ノ門ヲ鎖固メ、裏門許リヲ開キ、甲ヲ伏テ四郎カ歸ルヲ待居タリ。四郎城中喧噪ナリト聞テ周章シ、衣裝ヲ着ルニ不及湯帷ハカリシテ馬ニ乗り、大手ノ門ニ入ントスレハ、門閉タリ。裏門ヨリ入ントスルヲ輒ク擲捕レリ。○其夜中野常陸・牧野弾正忠、謀叛露顕シ、新田四郎生捕ラルト聞テ、己カ第宅及ヒ与同ノ輩ノ家々ニ火ヲ放テ、其黎明ニ一党悉ク牧野カ居城小松ニ楯籠ル。此城ハ行程近ケレハナリ。此放火ニ御城下一字モ不残焼亡ス。御城ハ山上ナレハ恙ナシ。

【史料2】「性山公治家記録 卷之三」天正12年（1584）甲申 公御年四十一

○此月（十月）、公隠居シ給ヒ、政宗君ニ御家督ヲ譲リ玉フ。（中略）米澤城邊館山ニ御城ヲ築キ、隠居所トシ給フ。其間、鮎貝安房宗重宅ニ御坐ス。天正十三年ニ至テ普請成就ス。即チ館山へ移住シ給フ。

【史料3】「貞山公治家記録 卷之二」天正15年（1587）丁亥 公御年二十一

○（二月）七日丙寅。去月十一日館山地取ノ絵図、老臣等ニ御談合有テ、今日御出、地割アリ。日暮御歸。此城ハ元性山公ノ御隠居所ナリ。今度又普請シ玉フ。其故不知。

【史料4】天正18年（1590）2月片倉藤衛門宛伊達政宗書状→館山での金掘り、要害付近の田畑への注意指示
出羽長井之庄おたて山川ニ、金ほり候事、其身ニ申付候、因之年々代物十貫文館え可指上候、併要害田畠などニ付而、聊損し候はぬやうよくよく申付ほらせ候へく候者也、仍証文如件

【史料5】天正18年（1590）2月伊達鉄斎宛書状→要害（館山城？）普請の指示

一 要害之普請、無油断可然候、但町中之者、不致迷惑候様ニ、可被加憐愍事專要ニ候

【史料6】「伊達天正日記」（天正15年七月）廿二日

一 天氣よし、覚範寺彖御出候、御面讃多もたせられならい被申候、相月齊七伯濱田御供被申候、其より川へ御出候、くつれより鶴つかわせられ候やういの内にて雲雀ハツ安衛門御たかにて御合候、其儘夜川ニ御出候、たて山御たてにて御めしあかり候、あけかたニ御帰候

【史料7】『米沢里人談』享和元年（1801）成立

一、館山城 上長井館山村にあり。今は諸土屋店舗八代町、伊達大膳政宗長井を掌握して、此地に城を築く、西は鬼面川を帯とし東は並松を郭とす、尤要害の城也、川西の山上にも又城あり、今城山と云ふ、千畳舗の大厦を構ひ備ををく政宗九代の孫越前守政宗、天正十八年八月、奥州葛西大崎に封を移す其後城なし。

此説又非也、先政宗長井を掌握し、高畑に在館す、山家霧・山家雪の詠歌は此所に於也、其子氏宗。其孫持宗其曾孫成宗。四代居之。成宗遂に館山に移る。明応三年四月十二日、尚宗、植宗父子、糠の目に出張し、川を隔て相戦ふ。是即父尚宗館山にあり、子植宗は高畑に在は也。此尚宗より五代半目政宗まで皆立山に在城す。